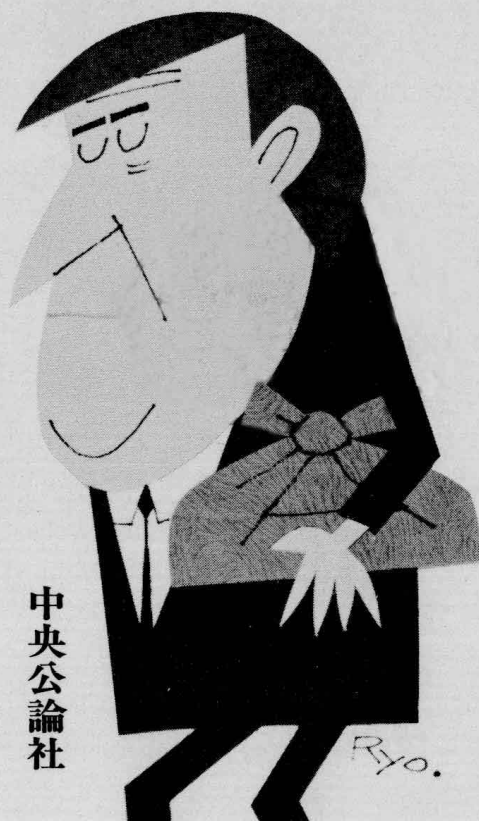


岡田誠三

定年後



中央公論社

〈著者略歴〉大正2年3月8日、大阪に生まれる 昭和11年大阪外国語学校英語科卒業 同年、朝日新聞社入社 記者として32年間勤務 「ニューギニア山岳戦」で昭和19年上期直木賞受賞 他に「失われた部隊」等の著作あり

定年後

昭和五十年三月十五日印刷
昭和五十年三月二十五日発行

著者 岡田 誠三

発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話(五六一)五九二一

振替東京二一三四

©一九七五 検印廃止

5	4	3	2	1	
血	死	独	古	定	目
緣		房	猛	年	次
			妻	葬	

220	187	133	67	5
------------	------------	------------	-----------	----------

装帧
柳原良平

定
年
後

この一書を

故上野精一翁と亡き父母の記憶に捧げる

1 定年葬

1 定年葬

大阪市北区中之島三丁目三番地、朝日新聞社の正面玄関の階段を私はのぼってゆく。昭和四十三年（一九六八）三月八日午前十時。私の五十五回目の誕生日であると同時に、三十二年間勤めた定年退職の日であった。

小学校の遠足の前夜、てるてる坊主を枕もとの雨戸につるして寝たように、どうか、その日は、よいお天気でありますようにと神に祈ったとおり、申し分のない晴天となった。知人の葬式に出る頻度がふえはじめる五十歳ごろから、葬式が天気の悪い日だと、会葬者がイヤな思いをするだろうと思い、よい天気だと、助かると思うにつけて、人生後半に来る定年という社会的な死と、そのあとにつづく生物的な死との二つの儀式のうち、本番の儀式のリハーサルともなる定年の日も好天であることを切望してやまなかった。

階段をのぼりながら私の頭に、ずっと昔に見たハリウッドのサイレント映画の画面が映る。

定年の日の朝、疲れた背広のサラリーマンが、彼の長年勤めていたニューヨークの中之島であるマンハッタンの高層ビルをくぐる。彼はエレベータに乗らない。何階も何階も同じ構造の階段をうつむいて機械的な足どりでのぼりつめて「社長室」と書いたドアを押す。厚いジュウタンの上を二部屋ほど一直線に通り返けた彼は最後の内扉をあけた。

マホガニーの机の前にブラインドのおりた窓を背景にして血色と恰幅のよい人物が端然と真正面のナメシ皮の回転イスにかけている。何の予告もなく、突如、目の前に現われた男を社長はぼかんと見る。うつむいた男は顔をあげると、思いきり口をあけて長い舌をべろりと出して立ち去る。社長は、一瞬の白昼の幻視をふるい落すように軽く頭をふって、端然とかけている。

定年は株式会社で現役の命数の尽きた大衆社員のために荘嚴しょうげんに営まれる生身なまみの葬式である。後日、会社が定年者を集めて催す春の旧友招待会の席へ私が顔を出した途端、「新仏しんぶつがまた、一人ふえたネ」と先輩定年者の旧仏たちからいっせいに声がかかって、「これから仲間入りさせてもらいます。どうぞよろしく」と、死後の世界の入口で顔つなぎのあいさつをした。このように新年度の定年者を「新仏」と呼ぶ慣用語法は、定年を社会的な死とみることを黙示している。

そのあとほどなく、その年度の定年者を重役が告別パーティに招くのは、初七日のお供え、定年給の支給が六十二歳で切れるのは七回忌にあたり、新聞の購読券が終身送られるのは永代供養料、春秋二回の旧友招待会は彼岸のお参りだ。新仏の私も満中陰のころ、御会葬御礼のあいさつ状を発送する。戒名 記者屋誠三 享年五十五歳。それは、生前に七七日の仏事を修める逆修ぎやくしゅうで

ある。

実は定年葬の日から一ヵ月あまり前、すでに私は一通の死亡予告を受け取っていた。それは、朝、出勤すると、私の机の上におかれていた。

昭和四十三年二月二日

朝日新聞社

大阪総務部人事課長㊦

岡田誠三殿

貴殿は来る昭和四十三年三月八日付で定年となりますから念のためご通知申し上げます。

「念のため、ご通知」という箇所を味読しながら私は、かつて社会部で「火事だ!」とだけ聞いて玄関から自動車に飛び乗り「とにかく火事の方へ行っくんか」といったというくらい、概して新聞記者にはあわて者が多いから、もしかすると、定年の日を忘れていた社員がいたことから、このような予告を出すのが人事課の仕事の一つになったのだろうかとも考えてみた。

たまたま、そのころ、ある船場の商社会社で定年の日から四ヵ月近くも出社していたサラリーマンがいたという実例を出先で聞いた。本人も人事課もとにもうっかりしていたらしい。なるほど、株式会社の機構が巨大化するにつれて定年予告は必要となろう。それに、「念のため」予告されることによって臨終の覚悟もさだまろうというものだ。田宮坊太郎の敵討ちではないが、敵

にひと太刀浴びせる前に「覚悟しや」というあの掛け声だ。予告を受けて不覚にもオイ、オイと声をあげて泣いた社員がいるという話も耳にした。

入社このかたおおむね外勤記者だった私は、社内よりも社外にいた時間の方が長いくらいだから、はじめから定年向きに出来ているとタカをくくった気持があった。だが、それは、学窓から朝日新聞社の玄関へ寒い風に当るまもなくはいった私の思いあがりであったことは、いざ、定年が人ごとでなくなってみて、いやというほど思い知らされた。オイ、オイと声をあげて泣いた社員どころの騒ぎではない。

在職中、給料の遅配のない企業にいた者はそれだけ定年の時の落差が大きいかも知れぬ。定年の十年前くらいから学芸部で映画関係を担当した私が、その時分、そろそろテレビの影がしのびよっていた京都太秦の撮影所を取材中、裏方の一人は、「わてらは、はじめから半分つぶれてるみたよなもんどす。慣れとりますエ」といった。サラリーマン的微温思考のショック療法になる思いがした。

太秦一带に自生していた竹ヤブをそのまま背景に利用して「ご用だ！ ご用だ！」とチョウチンを出したりひっこめたりする二巻物のチャンバラを撮っていたところからのお二階さんだった。お二階さんとは、いつも高い足場の上で仕事をするライトマンのことだ。うたかたのように消えては現われる各社のスタジオを転々としながら、今では自動車の排気ガスと宅地造成でさすがの竹ヤブも根こそぎほろぼされた太秦村の土質に、彼はなおしっかりと根をおろしている。このライトマンのような手に職をもつ人たちを、現役中の高揚した心の角度からめでいくしんでいた

1 定年葬

私は、定年が近づいてみてどれほどうらやましく思ったことか。

死亡予告を受けてはどなく、所属している部のデスクの肝煎で、四本社を通じて定年餞別金という香奠集めの行事がある。一口百円（給料引き）で「お願い」と書いた貼紙が編集局の入口の壁につるされる。これを社内用語で「首つり」という。口数と部名と氏名を記入する用紙がついていて、通りすがりの社員たちが、生前の本人との親疎感に応じて何口かを書き入れる。

「お願い」の文章は、生前の本人の業績と人柄を賛美のうちに追悼した結びが「つきましては、激励とともに別れの記念品をお贈りしたいと思えますので、ご賛同をお願いします」となって末尾に、世話人の名が四本社から一、二名ずつ数人ならぶ。その中にもし、重役や局長の名がまじっておれば故人の余栄いや増すことは、本番の場合の葬儀委員の顔ぶれと同じである。

いつのころからか、たび重なるうちに餞別貼紙はこのような一定の用式に固まってきている。会社が古くなって定年者の数が毎年、ふえてくると、首つりも編集局の入口の壁に過密となる。だから、四本社の庶務部では近年、それまで随時に出させていた首つりの曝し期日を三週間に限定した。

定年近い年齢になるにつれて、どうしても記入しないと義理の悪い身辺の先輩がふえる。それも、筆頭の記入者が十口と書いているのを見ると、あとにつづく者も右へならわざるをえなくなるので、月々の給料から差引かれる供養料もバカにならぬ。編集局の階下の印刷局の人たちのあいだでは、こんな場合、必ずしも十口へ右へならいをしない。五口とか三口と記入する人もいるように見うけた。こんなところにもホワイトカラーの見栄坊と、実質的なブルーカラーの違いが

微妙にのぞく。

とにかくそれを自分の定年のときに一気に取りもどす算段になるのだが、一体、何人くらいから、どれほどの金額が集まるかは、生前の本人の社交範囲とつきあいぶりによる素行評価のバロメーターともなるだけに、集計された餞別を部長の手からうやうやしく受け取るときは、人の心のぬくもりの裏にちょっとしたスリルがともなう。

朝の十時という時刻には、前日までの私なら、どこかの映画会社の試写室へそろそろ取材に出かけるところを、その日は逆に学芸部へはいつてゆく。

学芸部——と明朝の活字体が板ガラスの上に横書きに浮き出ているドアの前で一瞬、私はためらった。その日をもって幽明境をことにするドアを私は感慨をもって押した。前夜、人の世の情けのしみる送別パーティをひらいてくれた部長はじめ部屋の人たちすべてにあらためて感謝をのべたあと、取締役の大阪本社代表、編集局長のほか、各部の部長たちにつぎつぎとあいさつをしてまわってゆく途中の廊下で、顔だけはストの時の労組の会議でよく見知っている、たしか印刷局に違いないと思う人と二度までかち合って、

「あんたも、きょう定年でっか」

「そうですか、あんさんもでっか。若い顔したはるから分からへんがナ、そんなら、誕生日もおんなじやったんやなア」

湯気の立っている新仏になりたて同士の、ちょっとたがいに照れくさをまぎらす満面の笑み

を見せてすれ違いざまに言葉をかけあう。しなければならぬ式次第が山と詰まっているから、どちらも立ちどまってなどおれない。生葬式は、仏自身が喪主をかねるのだから忙しいのはこのうえもない。

ひととおり、あいさつをおえると、次は総務部人事課でサラリーマン生活最後の定年辞令を受け取った。それによれば「客員とする」とある。「客員」とは何であるかを知るために、社内機構と職階制にちょっとふれよう。

重役陣を頂点に総務・編集・印刷・営業の四局にそれぞれ局長と局次長があり、各局の下各部（ときに課）には部長一名と次長がいて、その下に部員がいる。身分制は職制と対応している。すなわち、役員・局長・局次長・部長・次長（あるいは課長）の下に「待遇」の文字がつく。職制にならなくても身分はあがることはあるが、職制になるとあがり方が早い。たとえば、職制で次長だった者が、その位置を外されたら、身分は一つ上の部長待遇となる。

在職中、平社員で終わった者には定年後の諱はなく、ただ「定年者」とだけいう。次長・部長待遇者は「客員」、局次長待遇以上は「社友」と呼ばれる。ところが、世間は妙なもので、「客員」の方が「社友」よりもえらいと受け取る向きがある。「友」より「客」の方が他人行儀なだけ上位だと思ふ日本人の文字感覚かも知れぬ。もっとも最近、最下位の「定年者」は廃して部長待遇以下はおしなべて「客員」と呼称するようにあらたまった。

役員待遇（重役）およびそれに準じる社友たちは慰労金の額もケタ違いに大きく、生前のランキングに応じて条件のめぐまれた死後再就職の可能性も多いから、それ以下の客員たちが体験す

るような定年葬のショックはやわらげられる。

概数で朝日新聞社の全従業員約九千人に対して、重役二十人、局長・局次長五十人とする。終身世襲的身分で、創業者であり大株主でもある村山・上野両社主家は努力目標とはならないからのぞく。すると、九千人中から重役になりうる命中率（確率）は0.0022で、十万分の二百二十二人、約分して五百人に一人となる。次に、九千人から重役の二十人を引いた八千九百八十人の中から局長・局次長になりうる命中率は0.0006で、十万分の五百五十六、約分して五百人に約三人である。重役と局長・局次長をあわせた命中率でも十万分の七百七十七人で、五百人中の四人にすぎない。これでは外れて当り前だ。

大阪の商人なら五百分の四の確率しかないような危険度の高いものには投資しないだろう。まじめな努力目標になるものではなからう。サラリーマン專業者としてこの会社の場合、定年までに少なくとも局長待遇以上になっていなければ、社会通念上の成功者とはいえない。部長待遇以下は「まあまあ、定年まで勤めてよろしおまつしやないか」と自他慰安的な引導を渡し、渡されながら定年葬で送り出される不確定多数の迷える衆生である。

ランキングは、どんな型の社会組織にも、それが組織である以上、必ずあるものではあろう。ただ、驚くべき身分上の細分化が制度として完備された、二世紀半におよぶ封建制社会を私たちは近い過去に持っている。人別帳に記載されない人外といわれる者のあいだにも階層序列の微分化があった。たとえば、座頭・舞人・猿楽・陰陽師・壁塗・仏師と限作・鋳物師・辻商人と辻盲目・猿回し・非人・鉢叩き・髪結・瓦師と土器師・金掘と石切・放下師・笠ぬい・渡し守・山

守・番屋・壺立・筆師・墨師・関守と牢番・鏡打・獅子舞・簀作・傀儡師・傾城といった風に身分差は職種と重なりあつて底の底まで貫徹してゆく。

社会秩序を犯した重罪人が死んで墓にうまつてゐる場合にも、掘りだして磔はりつけにした死体を塩水のオケに漬けて大阪三郷を引き回したうえ、墓破壊という罪名の刑罰を下した。現世の序列を補強するために死後の世界からも永遠にしめ出したのだ。こういう身分社会を通過してきた日本人の、ランキングに対して間断なく働く末梢神経は諸外国人とくらべて、勤勉な日本製トラジスタのように、ずばぬけて感度がよいかも知れない。日本で育つた知合いのアメリカ人が、日本人はミーティングの部屋へはいった途端、どのイスにすわろうかと頭の中でたえず将棋をさしている。初対面の日本人同士のあいさつは、たがいに相手のランキングを探りあう言葉づかいの選択に忙しくてほとんど意味のある会話はできないというのは、ある程度の実感をふくんでゐるようだ。

私が入社したころの社員食堂の中はホワイトカラーの編集局員とブルーカラーの印刷局員とに二分されていて、ガラス箱にはいった献立見本にも値段の差があったのが、戦後は一つになった。社会秩序の回復につれて会社で戦前の区別を復活するかどうか私は興味深く見守っていたが、ついに区別はなくなった。

新聞社内にもはじめて生まれた労働組合の活動を通じて印刷関係の人たちはめざましく成長し、私たちは接触する機会がふえた。ある夕方、親しくなった印刷局の人と肩を並べて会社を出た。フットいう中古のイギリス製の手動の印刷機を買って活字の種類もよほどふえたので、名刺や年

賀状を刷るのが何よりも楽しみだと彼は話した。少年のころから植字工だったというその知人の人柄に、いかにもつかわしい話だと私は、編集の仲間では聞けない新鮮な興味をおぼえるまま、「ちょっと、そこらでコーヒーでも飲みまよか」と、車道をへだてて見える、同僚と行きつけのホテルの中の喫茶店へ誘いかけて、ふと下を見ると、背広を着ているその人の足はゲタをはいていた。

「いえ、ここで失礼します」と彼は、舗道の曲り角ではにかんだふくみ笑いをして立ち去った。隙間風のような何かが私の内面をよぎった。

最後にまわった厚生部で、失業保険金の受け取り方から厚生年金保険にいたるまで老年の予後について懇切な説明を受けた。葬儀の式次第はここにすべて、とどこおりなくおわった。

会社の玄関の石段をおりて私は外路へ出た。時計塔の文字盤の長針と短針が12のところにかさなっていた。コールドールのように動かぬ土佐堀川の水面と、白いほこりをかぶった柳の枝にも、動こうとする季節の気配があった。死後の世界の風物は逆光の中にまばゆかった。

ここで断っておかねばならないのは、その日、会社の玄関を出入りして屋上の時計塔を見あげたというのは私の心象風景にすぎなかったことである。というのは、私が三十年間見慣れてきたこの、大正五年（一九一六）に出来た、白い化粧タイル張りの三階建の社屋は、その屋上の時計塔とともにすでに地上から消え去っていたはずで、現実には私は建築中の十三階建の新社屋の裏口にあたる仮玄関を出入りしていたのだった。私の命数は旧社屋とともにつきた。